

中村文子 初午に友と遊びしうすなの昔の梅は今咲くらむ

有賀晴子

はつうまの祭にきはふ森かけの稻荷のみまへ梅咲きにほふ

市田豊子

月寒く梅が香かななる畠道を折枝さけてゆく法師かな

木山鉢子

ゆげとく梅さざりなりいつこにも春のいたらぬ里やなからん

長谷部和子

垣ゆひしあるしほうせて里の子のさしさとなりぬ紅梅の花

四谷朝子

梅の花うつしうそしより都なる友もよひけり此山里に

池谷久子

月の瀬の道の行手の里つゝきにほひゆかしく梅が香をする

關屋愛子

幼児のいたがれながら手をのへて一花つみぬ紅梅のはな

玉井繁子

玉ほこの道のかたへの梅の花しばし旅人の心ねきらふ

西方鐵子

紙のへてうつし見んがな文机のかさしの梅のあまりに清き

田中千嘉子

賣家の庭せまふして紅梅の主まち顔にほころびにけり

原田信子 別れし友の許に

同

汝が友の庭の紅梅花さきぬいさ鶯にあひにさひ來よ

岩本美攷子

春の日を背中にあひて物ねへるおうなが宿の梅さかりなり

岡田文子

一村に春の日みちて梅さけりかしこの軒もこの川へも

鈴木安子

わが宿の一木の梅の花の香に思ひこそやれ月の瀬のやま

羽田晴子

みさり子の笑み初めたる朝より園生の梅もゑみ初めけり

佐々木雪子

幼子のいたつきまたくいえしより

佐々木信綱

あけたる窓の梅さきにけり

峰の八峰里の七里咲つゝく

梅の中ゆく谷川の水

或人の結婚の折に 静子

常盤なる松の二葉の若みとり

ふかきちきりは千代もかはらし

こひしさにたえずやあるらん君かふもと

夜毎々のゆめに見るなり

梅 同

にほはすは誰かは知らんしら雪の

なかに咲きたる梅の初花

大御代のすかたなるらん日の丸の

はた立てる門に梅の花さく

紫や聖書にはさむ蠶すみれ

蛙なく壬生のはづれや居士が家

春の野に花さんざしを拾ひけり

出代りや白髪の僕忠にして

春草や女の子生れし海人か家

春の雪笠の果と成りにけり

淡雪の空簾墨に暮にけり

草むらに顔を出したる蛙かな

猿澤の池の柳やおぼろ月

山門の底に蜂の巣くびけり

南の小川を隈る焼野かな

野を焼て更に炎のとげ／＼し

寫眞器を携帶したり春の旅

涼二芝稻文湖鯉箕愛蘿遊移  
月樓水村友月櫻山堂魚堂雪

おがちんを薄苔につゝんで頂戴な  
見送りて別る橋下や春の水  
夕風や霞の中の玉津島  
文机に土筆を並べ窓入けり  
勝鷹の血沙滴る蹴瓜かな  
木母寺を漕き出す船や臘月  
春風や一眸八百八十寺  
奥様は花見がほらの墓参がな  
鶯や梅津の里の朝ほらけ  
田螺ざる繩の帶せし男がな  
摘む芦の根よりも白き腕がな

### 長野盲人學校生徒俳句

#### 飯島八千溪

#### 春夏秋冬

夕暮の鐘の音浮ゆる寒さ哉

足袋穿いて幾度下駄の脱んさす

重着も軽く感する寒さ哉

軒垂れの音もやみたる寒さ哉

まだくさ探り樂しむ梅の花

一本の杖を力や菊の花

篇に春の誠を覚えけり

あなたまあ此所へお出でよ梅香る

弦圓聽郊松綠禾禾鬼玉閑同三ば  
月外軒勧坡坡外水浦水井みつえ女

祖同酒同同同まさ女

井山